

# 幼児期における「言語活動の充実」に関する研究

～岡山市公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査から～

## The Research on Enrichment of Language Activities in Early Childhood

— Preschool Teacher's Survey in Okayama City —

次世代教育学部こども発達学科

岡野 聡子

OKANO, Satoko

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

次世代教育学部こども発達学科

大野 鈴子

OHNO, Reiko

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

**キーワード**：言語活動の充実, 幼児教育, 領域「言葉」, 幼小連携

**Abstract** : This paper aims to describe the research into language activities for early childhood. Currently, there is little research into the field of early childhood education, whereas, there are extensive studies into primary aged education. Therefore, studies into enhancing language learning activities for this age group are imperative. To gain further insight, there were sixty eight preschools in Okayama city which participated in this survey. The results indicated there needs to be improvement in communication ability. In addition, advancement in internalizing knowledge is critical for this age group. Despite high levels of teacher training and engaging class activities, there still requires more entususes on developing cognitive ability. This will assist in bridging the gap between preschool and elementary school education.

**Keywords** : Enrichment of language activities, Early childhood education, Language Curriculum, Bridging gaps between Preschool and Elementary School

### 1. はじめに

2008年に改訂された新学習指導要領では、学校教育において充実すべき重要事項の第一番目に「言語活動の充実」が取り上げられた。言語活動の充実の目的を端的にいうと、言語力の育成である。言語は、知的活動（論理や思考）の基盤であるとともに、コミュニケーションや感性・情緒の基盤である。そしてその力の育成が取り上げられた背景には、第2節にて後述するが、昨今子ども達が抱える課題がある。

学習指導要領の改訂後は、小学校教育課程の国語科を中心として、各教科における言語活動の充実が図られてきた。たとえば、国語科（1年生）であれば、読んだ本について好きなどころを紹介する事例や伝えたいことを簡単な手紙に書く事例、社会科（3年生）の調べた事を確かめ合う事例、算数科（1年生）では、計算の意味や計算の仕方について具体物を用いて説明

し合う事例などがあげられる。言語活動の充実に関する研究を概観すると、先に述べたように小学校教育課程で取り上げられるものが多い他、中学校、高等学校に至るまでの各教科における指導法やカリキュラム作成といった事例研究や実践報告も数多くみられる。その一方で、幼児期における言語活動の充実に関する研究は、要領が改訂されてからのこの4年間において、管見するあたり数が少ないように思われる。

本研究では、まず、幼稚園教育要領の「言葉」の領域における改訂の内容の振り返りも含めて、幼児期における言語活動の充実とは何かを概観する。そしてそれを踏まえた上で、幼稚園の教育現場において言語活動の充実がどの程度意識され、また保育実践としてどのように取り組まれているのかを岡山市内の公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査を通して考察することを目的としている。

## 2. 言語活動の充実をめぐる

### (1) 言語活動の充実が求められた背景

幼稚園から高等学校に至る教育課程において、この言語活動の充実が特に重視された背景には、次の3つの事柄があげられる。

第一に、知識基盤社会の到来やグローバル化の進展に伴う社会構造の急激な変化である。変化し続ける社会に柔軟に対応できる人材を確保するには、幅広い知識と柔軟な思考力に基づいて判断することや、他者と切磋琢磨しつつ異なる文化や歴史に立脚する人々との共存を図るといった能力や資質の育成が求められるようになったことである。

第二に、国内外の学力調査にて、思考力や判断力、表現力等への課題が指摘されたことである。2003年に経済協力開発機構（OECD）にて実施されたPISA調査（Programme for International Student Assessment）の結果では、読解力の低い層の生徒の割合が増加したことや記述式問題に課題があることが指摘された。その後、2009年のPISA調査では、読解力や科学的リテラシー、数学的リテラシーはOECDの平均値よりも高得点群に位置していることが示されたものの、読解力については、情報相互の関係性を理解して解釈したり、自らの知識や経験と結びつけたりすることが苦手であると指摘された。また、国内の全国学力・学習状況調査の結果からは、資料や情報に基づいて自分の考えや感想を明確に記述することや日常的な事象について筋道を立てて考え、数学的に表現することなど、思考力・判断力・表現力等といった知識を活用する能力についての課題の存在が明らかになった。

第三に、教育基本法や学校教育法が改正され、育成すべき能力の内容がより明確になったことがあげられる。学校教育法第30条第2項の改正では、「2 前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」と明示された。

こうした3つの事柄が取り上げられる中で、幼児教育の在り方にも影響が与えられてきたといえる。中央教育審議会（2005）は、「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について—子どもの最善の利益のために幼児教育を考える—」の答申の中において、幼児教育の意義と役割を「学校教育の

始まりとして幼児教育をとらえれば、幼児教育は、知識や技能に加え、思考力・判断力・表現力などの「確かな学力」や「豊かな人間性」、たくましく生きるための「健康・体力」から成る、「生きる力」の基礎を育成する役割を担っている。」とした。これまで幼児教育は、幼稚園教育要領第1章総則第1幼稚園教育の基本においても述べられているように、「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」といった広範な意味づけがされていたが、2005年の中央教育審議会の答申における「学校教育の始まりとして」という文言が明記されたことによって、幼児教育の在り方が、学校教育をより一層意識したものになったと言えるだろう。

### (2) 幼児期における「言語活動の充実」とは何か

中央教育審議会答申（2008）の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」の中では、幼稚園教育における具体的な改善点として、a) 幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続とb) 体験と言葉の重視など子どもや社会の変化に対応した幼稚園教育の充実が取り上げられている。「b) 体験と言葉の重視など子どもや社会の変化に対応した幼稚園教育の充実」では、次の6項目が挙げられた。その中でも下線を引いた箇所は、幼児教育における言語活動の充実を考えるにあたって、重要な指標になるだろう。

- 教師や他の幼児と共に様々な出来事に出会ったり、活動したりして、多様な体験を重ねる中で、幼児の調和のとれた発達を援助していくようにする。その際、幼児の心が動かされる体験が次の活動を生み出すことを考慮し、ひとつひとつの体験の関連性を図るようにする。
- 幼児が、心動かされる体験をして、その感動や思い、考えを言葉に表し、そのことが教師や友達などに伝わる喜びを味わうとともに、相手の話を聞き、その内容を理解し、言葉による伝え合いができるようにする。
- 幼児が友達と共に遊ぶ中で、好奇心や探究心を育て、思考力の芽生えを培うことが大切であることを考慮し、幼児一人一人の興味や関心を生かしつつ、友達と共に試したり、工夫したりして、周囲の環境に対する新たな視点に気付いたり、新しい考えが生まれたりするようにする。
- いろいろな遊びの中で十分に体を動かし、その楽し

さを感じることや友達と楽しく食事をするなどの食に関する活動を通して、幼児の心身の健やかな成長を増進する。

- 幼稚園での生活の中で、音楽、身体による表現、造形等に親しむことを通じて、豊かな感性と自分なりの表現を培うことが大切であることから、表現する過程など、表現に関する指導を充実する。
- 日々の活動の中で、教師や友達に自分の言動を認められたりしながら、自分のよさに気付くことで、一人一人の幼児が自信をもって行動できるようにする。

幼児期における教育は、小中高等学校の教育課程のような一斉授業が実施されるものではなく、一人ひとりの幼児が日常生活の中で、人や物との直接的・具体的な体験を積み重ねながら、心情や意欲、態度を育むこととされている。答申の中で述べられた6項目の下線を引いた部分は、特に日常生活の中での言葉による伝え合いや思考力の芽生えを培う環境を重視することについて触れられていることがわかる。これは、言語活動の充実が取り上げられた背景からもわかるように、基礎的な知識・技能の習得だけでなく、知識を活用するための思考力・判断力・表現力等の能力の基礎を育成することが求められていることを明瞭に示しているといえるだろう。

### (3) 領域「言葉」の改訂と言語活動の充実について

幼稚園教育要領は、「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」の5領域から成り立ち、それぞれの領域にねらいと内容、内容の取扱いが設定されている。ねらいとは、生活の全体を通して子どもが様々な体験を積み重ねる中で、心情・意欲・態度を育てていくための目標であり、「内容」とは、「ねらい」を達成するために保育者が子どもに対して行う指導の中身である。

幼稚園教育要領の「言葉」の領域では、「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」と大目標が掲げられており、ねらいには、「(1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。(2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。(3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。」の3つがある。こ

の3つのねらいを達成するための内容は、「(1) 先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする。(2) したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。(3) したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、わからないことを尋ねたりする。(4) 人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。(5) 生活の中で必要な言葉が分かり、使う。(6) 親しみをもって日常のあいさつをする。(7) 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。(8) いろいろな体験を通してイメージや言葉を豊かにする。(9) 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。(10) 日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。」の10項目がある。

2008年幼稚園教育要領における領域「言葉」の改訂点は、次の2点であった。1点目が、内容の(2)である。幼稚園教育要領が改訂される前まで、「(2) したこと、見たこと、聞いたこと、感じたことなどを自分なりに言葉で表現する」であったが、改訂により、下線部の「考えたりなどしたこと」という文言が追加された。2点目は、内容の取扱いにおいて、「幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通じて次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること」という項目が新設されたことである。内容の改訂や新設された内容の取扱いの項目にて下線を引いた「考えたり」、「伝える」、「聞く」、「伝え合う」は、思考力や伝達力の育成といった言語活動の充実が明確に意識されていることの表われであろう。

## 3. 調査概要

### (1) 調査の目的

岡山市内にある68ヶ園の公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査を通して、幼稚園の教育現場において言語活動の充実がどの程度意識され、また保育実践の中でどのように取り組まれているのか、特に伝達力や思考力の育成に関する具体的な実践事例に着目しながら考察を深めることを目的としている。

### (2) 調査の対象と調査方法

岡山市内にある公立幼稚園合計68ヶ園の459名の教諭(常勤・非常勤問わず)を対象として、質問紙(A4版裏表)による調査を実施した。質問紙の配付・回

収は、郵送にて行った。調査時期は、2012年9月11日～9月22日の12日間である。電話や葉書による督促などは行っていない。質問紙の有効回答数は178票、有効回収率は38.7%であった。

### (3) 調査内容

質問紙の内容は、以下の通りである。分析は、単純集計とクロス集計を用いて行った。

#### ①調査対象者の属性について

1. 教諭の経験年数
2. 現在の担当クラス

#### ②幼稚園教育要領について

1. 幼稚園教育要領領域「言葉」の改訂部分の把握について（5件法）
2. 指導計画作成時に幼稚園教育要領領域「言葉」を参考にしているかについて（5件法）
3. 幼稚園教育要領以外に参考とするものについて（選択式、複数回答可）

#### ③伝達力と思考力の育成を意識した保育について

- 4-1. 伝達力の育成を意識した保育の実施について（5件法）
- 4-2. 具体的な実践例（自由記述）
- 4-3. 思考力の育成を意識した保育の実施について（5件法）
- 4-4. 具体的な実践例（自由記述）

#### ④幼小連携等、言語活動の充実について

5. 領域「言葉」と小学校「国語科」との関連を意識した保育の実施について（5件法）
6. 小学校との「言語活動の充実」を推進するための連携や研究会などの実施の有無について（択一式）
7. 6における具体的な内容について（自由記述）
8. 園独自の領域「言葉」にかかわるカリキュラム作成の有無について（択一式）
9. 8における具体的な内容について（選択式、複数回答可）

## 4. 結果と考察

### ①調査対象者の属性について

調査対象者の教諭経験年数は、20年以上が28%と最も多く、次に3年未満が25.2%となっている。現在担当しているクラスでは、4歳児が42.1%、5歳児が39.8%であり、4、5歳児を担当している者が81.9%を占めている。（表1、2）

表1 経験年数

経験年数	実数	%
3年未満	45	25.2
3年以上～5年未満	19	10.6
5年以上～10年未満	28	15.7
10年以上～20年未満	36	20.2
20年以上	50	28.0

表2 現在の担当クラス

現在の担当クラス	実数	%
3歳児	12	6.7
4歳児	75	42.1
5歳児	71	39.8
その他	20	11.2

### ②幼稚園教育要領について

1. 幼稚園教育要領領域「言葉」の改訂部分の把握については、だいたい把握しているが53.3%、少し把握しているが27.5%である。かなり把握している・十分に把握していると答えた者を合わせると11.1%であった。次に、教諭経験年数別に見ると、把握している割合の違いとして、経験年数が高いほど、改訂部分を把握していると回答した者の割合が高くなっていることがわかる。20年以上の教諭経験になると、ほとんど把握していないが1件であり、少し把握しているが4件と、把握していないと回答した者は、ほとんどいない。（表3）

2. 指導計画作成時に幼稚園教育要領領域「言葉」を参考にしているかでは、だいたい参考にしているが39.3%、少し参考にしているが35.3%である。幼稚園教育要領は、文部科学省が告示する幼稚園における教育課程の基準のことである。教諭経験年数別に見ると、幼稚園教育要領領域「言葉」の改訂部分の把握についての回答と同じように経験年数が高いほど幼稚園教育要領領域「言葉」を参考にしていると回答している。（表4）

表3 領域「言葉」の改訂部分の把握について

経験年数	把握	ほとんど把握していない	少し把握している	だいたい把握している	かなり把握している	十分に把握している
3年未満 (44)		5	16	20	2	1
3年以上～5年未満 (19)		2	9	7	1	0
5年以上～10年未満 (28)		2	12	13	1	0
10年以上～20年未満 (35)		2	8	21	3	1
20年以上 (50)		1	4	34	10	1
計 (176)		12 (6.7%)	49 (27.5%)	95 (53.3%)	17 (9.5%)	3 (1.6%)

\*無回答：2

表4 領域「言葉」の参考に使っているかについて

経験年数	参考頻度	ほとんど参考にしていない	少し参考にしている	だいたい参考にしている	かなり参考にしている	非常に参考にしている
3年未満 (44)		5	24	13	1	1
3年以上～5年未満 (19)		0	10	5	4	0
5年以上～10年未満 (28)		1	12	11	3	1
10年以上～20年未満 (36)		4	9	15	8	0
20年以上 (50)		2	8	26	13	1
計 (177)		12 (6.7%)	63 (35.3%)	70 (39.3%)	29 (16.2%)	3 (1.6%)

\*無回答：1

3. 幼稚園教育要領以外に参考とするものについて(選択式、複数回答可)では、過去に園で作成したものは61件、次に保育記録からの幼児の姿が52件、保育雑誌(市販の月刊等)が41件、研究会資料等が19件、地域の園と協同作成は0件であった。日常の保育記録からの幼児の姿を参考にすることは、日常生活の幼児の発達段階に合わせたものであるため、望ましい取り組みであるといえる。(表5)

表5 幼稚園教育要領以外に参考と具体事例

項目	実数
過去に園で作成したもの	61
保育雑誌(市販の月刊誌等)	41
研究会資料等	19
保育記録からの幼児の姿	52
地域の園と協同作成	0
その他	0

\*無回答：2

### ③伝達力と思考力の育成を意識した保育について

4-1. 伝達力の育成を意識した保育の実施については、かなり意識しているが56.1%、十分に意識しているが12.3%であり、68.4%が意識していると回答し

ている。具体的な実践例の記述から、「日常の保育を通して行われている実践」と「設定保育の活動として取り組まれている実践」の2つに分類をした。(表6)

#### 【日常の保育を通して行われている実践例】

- 園の方針としてコミュニケーションについて取り上げている。その中でも聞く力を重視しながら保育している。
- 幼児の姿を見守る中で、自分から伝えよう、伝えたいというような態度、言葉等が見られた時は、認め、意識付けをする。必要感が持てるような投げかけ方を工夫する。伝えるばかりではなく、「聞く」、「聞こうとする」態度も身に付くように援助している。
- 友達とトラブルになった時など、自分の気持ちを相手に伝えるよう、声をかけ、どのように言えば良いのか解らないときは、教師が仲立ちとなって言葉を知らせる。
- 自分の思いを十分受け止めてもらえる喜びを感じるようにしている。その上で、共通のイメージを共有した遊びを進める中で、伝え合う力の育成につなげたいと考えている。
- 生活の中でしたいこと、してほしいことが言葉で伝

表6 伝達力の育成を意識した保育について

経験年数	意識	ほとんど意識していない	少し意識している	だいたい意識している	かなり意識している	十分に意識している
3年未満 (44)		0	9	12	22	1
3年以上～5年未満 (19)		0	2	5	9	3
5年以上～10年未満 (28)		0	1	11	13	3
10年以上～20年未満 (36)		0	2	6	22	6
20年以上 (50)		0	0	7	34	9
計 (177)		0 (0%)	14 (7.8%)	41 (23%)	100 (56.1%)	22 (12.3%)

\*無回答：1

表7 思考力の育成を意識した保育について

経験年数	意識	ほとんど意識していない	少し意識している	だいたい意識している	かなり意識している	十分に意識している
3年未満 (45)		0	8	19	18	0
3年以上～5年未満 (19)		0	1	7	9	2
5年以上～10年未満 (28)		0	2	12	11	3
10年以上～20年未満 (36)		0	2	10	18	6
20年以上 (49)		0	1	8	36	7
計 (177)		0 (0%)	14 (7.8%)	56 (31.4%)	92 (51.6%)	15 (8.4%)

\*無回答：1

えられるよう問いかけたり、具体的に言葉を知らせたりしながら保育をしている。また簡単な相談ができる場を意識して設けるようにしている。

- 感動体験ができるような工夫をし、幼児が教師や友達に思わず伝えたいくなるようにしている。また日常のさまざまな場面で幼児が互いに思いを出せるような援助を心掛けている。

【設定保育の活動として取り組まれている実践】

- あいさつ運動
- 親子の共通体験（親子絵本、親子栽培、親子飼育、親子わらべ歌など）
- 降園前の「あのねタイム」（1日の遊びの振り返り）
- 絵本紹介
- 「きいてきいてタイム」（伝え合いの機会の場づくり）
- 話し合いの活動

4-3. 思考力の育成を意識した保育の実践については、かなり意識しているが51.6%、十分に意識しているが8.4%であり、60%が意識していると回答している。具体的な実践例の記述も伝達力の育成と同じように「日常生活の保育を通して行われている実践」と

「設定保育の活動として取り組まれている実践」、その他に「環境構成を意識した保育実践」の3つに分類をした。（表7）

【日常の保育を通して行われている実践例】

- すぐに「〇〇したらいいよ」というのではなく、「〇〇はどうしたらいいかな？」や「～をするには何があったらできるかな？」と言葉掛けに気を付けながら幼児からアイデアが出るように保育をしている。
- 教師が全てを説明するのではなく、「どうだったかな？」と幼児に問い返す。答えを知っていることでも意図的に質問をして幼児の反応（答え）をみる。
- どこを工夫したのか、どうしてそう思うのかなど、一歩踏み込んで聞く。
- 教師も考える姿勢を見せる。教師ばかりが先走ってしゃべらず、幼児の思いが出るように心掛けている。
- 自分の思いを話す場をつくる。色々な体験をさせる。教師が豊かな言葉で表現する。活動の振り返りを。（一日の色々な場を使って。）

表8 領域「言葉」と小学校「国語科」の関連について

経験年数	意識	ほとんど意識していない	少し意識している	だいたい意識している	かなり意識している	十分に意識している
3年未満 (45)		15	20	8	1	0
3年以上～5年未満 (19)		1	12	6	0	0
5年以上～10年未満 (28)		1	12	10	1	0
10年以上～20年未満 (36)		3	19	6	6	1
20年以上 (50)		3	19	11	13	1
計 (176)		23 (12.9%)	82 (46%)	41 (23%)	21 (11.7%)	2 (1.1%)

\*無回答：9

【設定保育の活動として取り組まれている実践】

- おはなしタイム（自分の思いを発表する場づくり）
- 言葉あつめ
- 連想ゲーム
- しりとり

【環境構成を意識した保育の実践】

- 自分で感じた事、疑問に思ったことを図書館などで調べようとするための環境、援助。
- 自然とのかかわりや鬼ごっこ遊びの環境構成を充実させたい。
- 試したり工夫したりすることが出来る環境構成の工夫。見たり、触れたり、感じたりなど「五感」を働かせることができるようなものや、自然とのふれあいなどを通して、気付いた事やわかった事、感じた事などを言動で伝えたくなるような雰囲気作りや人間関係作りを心掛けている。
- 選んだ遊びの中でじっくり取り組める時間の保障。

④幼小連携等、言語活動の充実について

5. 領域「言葉」と小学校「国語科」との関連を意識した保育の実践についてでは、少し意識しているが46%と最も多く、次にだいたい意識しているが23%、ほとんど意識していないが12.9%である。傾向として、無回答も9件あり、国語科との接続という意味合いが不明確であったと思われる。設問に問題があったとも思われる。領域「言葉」と「国語科」との関係は、園田(2009)が「領域「言葉」は、小学校「国語科」のたんなる「前領域」ではなく、あくまでもベーシックな「原領域」としての独自性をもって位置づいているものである」と指摘しながらも、子どもの発達を考慮した場合、小学校とのカリキュラム構成の連続性を意識した保育の必要性があると述べている。(表8)

6. 小学校との「言語活動の充実」を推進する連携

や研究会などの実施の有無については、行っているが43.2%、行っていないが55.6%であった。(表9)

表9 小学校との「言語活動の充実」の連携等について

項目	実数	%
行なっている	77	43.2
行なっていない	99	55.6

\*無回答：2

小学校との「言語活動の充実」を推進するための連携や研究会などの実施を行っていると回答した者が上げた具体的事例は、いきいき学校園作りが96.1%であった。いきいき学校園作りとは、幼稚園や小学校、中学校が互いに授業公開をしたり、出前授業を行うなどの岡山市における幼小中連携事業の一つである。また、研究会等の参加では、小学校の校内研修会において幼稚園の活動内容の紹介や小学校教諭からの質問に応える場を持ったり、教科別（例：領域「言葉」と小学校「国語科」との連携）に行う研修会、言語活動を伴う交流実践の研究会を実施している。(表10)

表10 具体的事例

項目	実数	%
いきいき学校園づくり事業	74	96.1
研究会への参加 等	3	3.9

\*無回答：0

8. 園独自の領域「言葉」にかかわるカリキュラム作成の有無については、作成をしていると回答した者が32.5%であり、作成をしていないとの回答が66.8%であった。6割以上の園が、「言葉」にかかわるカリキュラムの作成を行っていないとしているが、その理由としては、幼稚園教育要領にある5領域が、それぞれ個別で指導されるものではなく、「総合的に教

育されるもの」という特性を持っているため、言葉にかかわるカリキュラムの作成のみをする必要がないものと考えられる。(表11)

表11 「言葉」のカリキュラム作成の有無

項目	実数	%
作成をしている	58	32.5
作成をしていない	119	66.8

\*無回答：1

9.8において、言葉にかかわるカリキュラムを作成していると回答した者が選択した具体的な内容については、年間指導計画・月案・週案に含めて作成をしているが39.6%、「言葉」のカリキュラムを単独で作成しているが25.8%、そのどちらともを実施していると回答した者が20.6%であった。その他の具体的内容としては、「人とかかわる年間計画」という園独自のカリキュラムを作成し、その中の項目として「話す力・聞く力」という項目を立てているという回答が1件あり、今年度作成予定との回答が3件であった。(表12)

表12 具体的内容について

項目	実数	%
年間指導計画・月案・週案に含めて作成をしている	23	39.6
「言葉」のカリキュラムを単独で作成している	15	25.8
年間指導計画・月案・週案に含めて作成をしている、および、「言葉」のカリキュラムを単独で作成している	12	20.6
その他	6	10.3

\*無回答：2

## 5. おわりに

中央教育審議会は、「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について－子どもの最善の利益のために幼児教育を考える－」(2005)の中で、近年の幼児の育ちについて、基本的な生活習慣の欠如や食生活の乱れ、自制心や規範意識の希薄化、運動能力の低下、コミュニケーション能力の不足、小学校生活にうまく適応できないなどの課題を指摘した。

これらの幼児の育ちに対する課題は、社会構造が大きく変化する中で指摘されるようになったものであ

る。そうした中で、我が国の教育によって育成が期待されるのは、思考力・判断力・表現力等の能力の基礎を担う言語力である。

幼児期に行う教育は、小中高等学校で行われる一斉授業としての性質をもっておらず、教諭は園児と個別に対応しながら、幼稚園教育要領の5領域を総合的に教育する必要がある。日常生活の中で言語活動の充実を取り上げた指導をどのように行うべきかについては幼児教育の現場においても大きな課題の一つとなっているが、本調査結果からもみえるように、「言葉」にかかわるカリキュラムを年間指導計画・月案・週案に含めて作成をしている園や、言葉のカリキュラムを園独自で作成している園もあるなど、幼児期における言語活動の充実を着実に進んでいるともいえる。今後は、幼児教育が学校教育の始まりとして意識される中で、小学校の教育内容との連携・接続を考えた保育実践の在り方をより一層模索する必要があるだろう。

(本研究は、財団法人福武教育文化振興財団の「学校・地域における学力向上等の研究や実践活動への助成(公募)」にて行いました。)

## 引用・参考文献

- 阿部明子編著(1995)『保育内容・言葉』建帛社  
 中央教育審議会答申(2005)「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について－子どもの最善の利益のために幼児教育を考える－」  
 和田典子(2008)「小学校「国語」への連携と幼児期の文字指導について」近畿医療福祉大学紀要 9(1), pp.47-64  
 森元真紀子・川上道子(2008)「保育内容に関する研究(I):平成元年版幼稚園教育要領改訂に焦点を当てて」中国学園紀要 7, pp.109-119  
 文部科学省(2008)「幼稚園教育要領」  
 文部科学省(2008)「幼稚園教育要領解説」  
 中央教育審議会答申(2008)「幼稚園,小学校,中学校,高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」  
 小田豊・芦田宏編著(2009)『保育内容言葉』北大路書房, pp.36-43